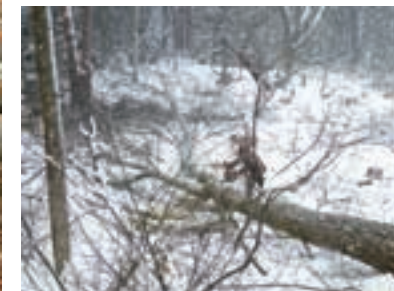


「原木を選ぶ」

松葉屋の家具製作は原木の買い付けから始まります。身近な山で伐採された材木で家具製作をする。そう決めた私たちは信濃町に、大町に、様々な山を見てきました。そして今回買付けしたのが北信木材センターです。ここで何本かの美しい原木を選ぶことができました。それは長野市からすぐそばの信濃町でとれた木。身近な森林でとれた木、身近な人たちの手が加わった木。私たちはこの木を使った家具作りを始めることにしました。



「製材と乾燥」

一枚板をはじめ、無垢の木材は「乾燥が命」。今回原木を持ち込んだカネモクさんは1954年の創業以来広葉樹の製材と乾燥を一貫して自社工場で行っている木材の乾燥専門会社です。松葉屋では一枚板のテーブルをはじめ、様々な樹種の製材と乾燥をお願いしています。

昔の家は隙間風が入り、断熱も施されていない住宅でしたが、今の住宅は断熱が施された高気密な状態。その上、冷暖房でかなり乾燥した室内になっています。そんな環境下でも影響を受けない、現代の住宅に合った乾燥をしなければなりません。そのため、木の水分量（含水率）を測りながら、また樹種による木のクセなどの違いを見極めた人工乾燥が必要不可欠です。まず、自然乾燥で含水率を23%～25%くらいまで下げた材を蒸気乾燥室に入れます。一旦、蒸気乾燥で7%くらいまで下げたあと、加湿して全体を均一な10%±2%にしていきます。

「蒸気で乾燥させるとは？」

乾燥させるのに、なぜ蒸気・水分が必要なのか？不思議ですよね。乾燥させるときに水分を飛ばそうと表面ばかり乾かしてしまうと中の水分は抜けにくくなってしまいます。最初は蒸気で全体をひたひたに覆い、木の中の水分をゆっくり少しずつ引き出していく。蒸気で蒸された木材は繊維が柔らかくなり、全体が同じ水分量になる状態だと、木の中の水分をきちんと引き出すことができるんです。製材から天然乾燥、人工乾燥を経て1年半から数年、ようやく原木が家具製作に進める時期になりました。



「乾燥材を工房に運ぶ」

ここから、松葉屋のオーダー家具などを製作してくれている、パートナー工房へ持ち込みます。木を伐り、製材し、乾燥する。ようやく家具づくりの道半ば。いよいよ家具の製作にかかります。松葉屋の信頼の置けるパートナー工房さんに乾燥材を持ち込みます。メール添付してポチッというわけにはいかないから木材の運搬もなかなか大変です。



「松葉屋がつくるもの」



栗の戸棚

基本の形から、引き出しや棚板の数、サイズをアレンジしてオーダーで製作できる戸棚です。



ドロリーフテーブル

2人がけが4人がけに、天板が広がる伸張式の松葉屋オリジナルのテーブルです。(4人がけが6人がけもあります)



学習机

天板から引き出し、脚まで全てを同じ材の一生使える机です。

「お届けする」



お客さまの手に渡って、ようやく僕たちが作った家具の役割が始まります。

「直し、繕い、使う」



桐ダンスの削り直し

お嫁入りの道具として使っていた桐ダンス。塗り直して新しいもののように生まれ変わりました。息子さんのご結婚のお祝いに、引き継がれていきました。

「鹿の革で家具を作りました。」

「獣害」で長野県内で年間4万頭捕獲される鹿。
今ようやくジビエ料理に鹿肉を活用されはじめましたが
食肉にされる際剥がされる皮の活用はほとんどされていません。

実は日本でかつて多用されたのは鹿革。馬の脳髓から取り出した「脳漿（のうしょう）」
で革をなめしていた歴史があります。

現代では、牛革に比べてあまりなじみはありませんが、最も古くから親しまれてきた鹿革は、
奈良時代の刀剣の鞘や日本最古の足袋などに多数の鹿革製品を見ることができます。また、
飛鳥時代から江戸時代にいたるまで、武具にしばしば鹿革を使った部品が発見されていま
す。日本において牛革を使うようになるのは比較的後のことなのです。「革」といえば鹿革
という時代の方が長かったようです。

布のようにしなやかな質感のため、今でも洋服や手袋などに使われることが多く
布よりも丈夫なため、椅子の張り地にも適しています。

松葉屋では、利用されなかった皮を植物性タンニンなめし、無着色で鹿革として活用する
流れをつくりました。鹿革本来が持つ、淡く優しいピンク色が使い込むほどに艶が増す味
わいは、その様も楽しむことができます。

今回、鹿革の小椅子・スツールに加え、鹿革クッションと栗材で作ったソファを出品い
たします。

